

同窓生シリーズ

36

木簡は語る



第37回生 山下信一郎氏

昭和41年生まれ。東京大学文学部卒、同大学院修了(日本古代史)。現在、奈良国立文化財研究所・研究員(平城宮跡発掘調査部)。

門」と、東院と呼ぶ地区の庭園の復原事業が完成しました。また、奈文研は都の市街地である平城京の発掘も行なうこと

いえましょう。このような遺構・遺物が出土する平城宮跡は、現在、国の「特別史跡」として国有地化されて手厚く保護され、さらに「世界遺産」登録候補の一つとして日本政府から国連ユネスコに推薦されています。広大な敷地は遺跡博物館(サイト・ミュージアム)として計画がすすみ、朱雀門や東院庭園の復原も完成しました。しかし、平城宮跡が現在あるのは先人の血のにじむような保存活動の賜物です。埋蔵文化財についての国民的理解が進んだとはいえ、依然として多くの遺跡が破壊されているのが現状です。平城宮跡は、単に古代のロマンに想いをはせるだけの場ではなく、私たちが子孫に何を残すべきなのかという、現在の問題を考えさせてくれる場でもあります。このような古

奈良国立文化財研究所(略称、奈文研)は、昭和二七(一九五二)年、奈良県・京都府に所在する神社や寺院の建築・美術・歴史の総合的な調査研究を行なうために創立された、文化庁の機関です。発足後暫くして、奈良・平城宮跡や飛鳥藤原宮跡の発掘調査も行なうこととなり、国立の機関では唯一、埋蔵文化財の発掘調査・研究を行なう組織として現在に至っています。業務の内容は多様で、各地に残る貴重な建築の調査や、興福寺を始めとする寺社の古文書調査なども行なっています。

私の属する平城宮跡発掘調査部は、七二〇年から七八四年まで日本の首都であった平城宮の中核部Ⅱ平城宮跡の発掘調査・研究を主たる業務として行なっています。奈良時代、平城宮には天皇の居住した内裏(だいら)や、二官八省などの中央官庁が林立していました。研究所はこれらの遺跡を継続して発掘し、今年の春現在、第二九二次まで調査を進め、大きな成果を上げています。

私には調査部の一員として発掘調査を行ないませんが、日本古代史を専攻とする立場から木簡(もつかん。木片に墨で文字を記したもの)などの出土文字史料の整理・研究にあたることを主な任務として、時に寺社の古文書の調査もすることもあります。

武蔵国で「蘇」を生産していた事実が分かり、当時の食生活を知る上で興味深いものです。この他にも、食料を請求する木簡とか純然たる公文書を記した木簡があり、「学びて時にこれを習う：」と中国の古典「論語」の一節を手習いしたものもありました。奈良時代の歴史を知る上での史料は多くありませんから、新

代への発掘についての手帳な入門書として、田中琢編「古都発掘」(岩波新書、一九九六年刊行)があるので、ご関心のある方はお読みください。なお、今年七月一八日から八月二三日までの期間、母校のお膝元、新宿・三越美術館(三越パライト)にて奈文研などが主催して「なら平城京展98」を開き、これまでの平城京発掘の成果を観覧に供します。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

果を活用して、今年、平城宮の正門である「朱雀

の建物跡などの遺構、木簡・土器・瓦などの遺物が出土しますが、このな

「朱雀」は

「朱雀」は

「朱雀」は

